

# やまのべ 偉人伝心 (安達峰一郎編)

## 2. 腕白でガキ大将ではあったが誰よりも努力家だった安達峰一郎

### ●幼少期(2)

安達峰一郎博士の幼少期については、前回紹介したように鏡子夫人は秀才ぶりを発揮したことをいくつかの和歌に詠んでいました。

一方、昭和15年に山辺郷土史研究会がまとめた『郷土史読本』のなかでは、幼少期について次のように書いています。

“兄弟は博士を合わせて男三人妹二人の五人であって、所謂厳父慈母の雰囲気の裡にその幼少時代を送ったのであるが、博士は世にいう神童ではなかった。否父久氏からは余り賢いと思われてさえ居なかったのである。後年博士をして名を成さしめた所以のものは一に彼の努力と負けじ魂の結果であると見ることが出来る。”

と述べたあと、父からは「覚えな<sup>うち</sup>中は来るな」といわれるほど厳しく指導されたことが紹介されています。

また、故武田泰造氏の戦後の著書『山辺町郷土概史』のなかでは、安達家近所の了広寺の故武田智蔵老師が幼少時について語った話として次のように述べています。

“彼を所謂、神童などと思ったことはないそうで、近所の子供等と連れだって、よく寺の境内に遊びに来たのであるが、墓地の周囲を駆け巡るのはよいとして、建物の屋根に上ったり、時ならぬ時に、釣鐘をうち鳴らしたりして、寺の者を困らせたとのことである。ただ、当時を振り返って取りあげるならば、彼は何時でも仲間を中心になっていた、ということであった。”

と語ったと述べたあと、高楯村の子どもたちが隣の大寺村の子どもたちと石合戦のけんかのときなどは、彼は大将にまつりあげられ合戦の先頭にたって戦い、いつも相手を退散させたとも述べています。また、合戦の時彼がいないと大寺からナメられるので、合戦のたびごとに迎えにいったという逸話を、近所の人たちによって後々まで語られ

たといます。

このように安達博士の幼少期について、秀才であったという見方とそうは思えなかったという見方があるようです。

### ●大杉への誓い

そのほかに幼少期のこととして伝えられているのは、小鳥海山に登り、山頂に茂る大杉が周囲の樹木より群を抜く巨大さに感動し、その大杉に向かって「今に見ている、<sup>おれ</sup>己もあの大杉のような、大人物になって見せるぞ」と誓ったといわれます。

後に、幼名が峰治(次)郎であったのを峰一郎と改名した理由はこの大杉によるといわれています。しかし、この大杉は安達博士が山辺を去ってから雷が落ちたりして折れてしまいました。

大正6年、最後に帰郷したときに小鳥海の大杉が見えなかったことを嘆き、知人に“悲鳥海山之失冠”としたためた書を残していきました。さぞ残念に思われたのでしょうか。

ちなみに、小鳥海山の大杉から製材された板一枚が現在、生家に寄贈されて保存されています。小鳥海山の現在の大杉は2代目の大杉だそうです。

文：山辺町ふるさと資料館長 佐藤<sup>つとむ</sup>継雄

参考図書：山辺郷土史研究会『郷土史読本』(昭和15年発行)、武田泰造『山辺町郷土概史』(昭和45年発行)



“悲鳥海山之失冠”がしたためられた書